

都市民と農山村をつなぐ仕事と学びの創造 Creative Learning of Traditional Knowledge and Subsistence

農山村の環境と生活文化から学ぶ都市との交流に関する 調査研究報告書

公益社団法人国土緑化推進機構「緑と水の森林ファンド」中央事業助成



2017年6月

特定非営利活動法人 自然文化誌研究会

事業について

事業名 農山村の環境と生活文化から学ぶ都市との交流 ～持続可能な社会を目指して

概要 日本の農山村、とりわけ山間地の集落では、過疎高齢化の影響が深刻となり、長年受け継いできた自然と調和した伝統的な暮らしが忘れられる寸前に立ち至っている。一方で、何百年、時には千年以上にわたって暮らしを維持してきた集落の技術や知識には、現代的な課題となった「持続可能な社会づくり」への示唆が豊かに残されていることが明らかになってきている。

土地から切り離されて世代を重ねた都市部の住民には、この技術や知恵を総合的に体験し、自らの暮らしの組み立てを考え直す機会を極めて有効である。自然を単に体験するだけでなく、その地に育まれた生活文化全体を題材とした都市との交流は、これからの農山村と都市住民の交流の新たな姿として探求される必要がある。本事業では、実際のプログラム展開をしつつ、この新たな交流の姿を描き出す。

期間 平成 26 年（2014 年）7 月から平成 29 年（2017 年）6 月まで
対象区域 山梨県丹波山村、小菅村、上野原市、神奈川県相模原市緑区、新潟県南魚沼市
助成 公益社団法人国土緑化推進機構「緑と水の森林ファンド」中央事業
事業主体 特定非営利活動法人自然文化誌研究会
協力 特定非営利活動法人 ECOPLUS

伝統知研究会メンバー

中込卓男	特定非営利活動法人自然文化誌研究会代表理事
中込貴芳	特定非営利活動法人自然文化誌研究会副代表理事
黒澤友彦	特定非営利活動法人自然文化誌研究会理事・事務局長
藤盛礼恵	特定非営利活動法人自然文化誌研究会理事、東京学芸大学非常勤講師
小柳知代	東京学芸大学講師
木俣美樹男	東京学芸大学名誉教授、前財団法人森とむらの会理事
高野孝子	早稲田大学教授、前財団法人森とむらの会理事
大前純一	特定非営利活動法人 ECOPLUS 理事・事務局長
阿部勉	前財団法人森とむらの会専務理事

目次

まえがき・はじめに1
農山村の暮らしの幸せな暮らしと生業2
実証的都市山村交流プログラム5
環境学習セミナー・シンポジウム14
実証的都市山村交流プログラムの評価・検証21
雑穀街道の提案30
あとがき32

まえがき

財団法人森とむらの会は2010年（平成22年）に解散し、残余財産を公益社団法人国土緑化推進機構に寄付した。その際機構のご厚情により、森とむらの会の継承事業として3か年を1期とする6年間の事業が承認され、前期の成果として2014年に「伝統知の現代的価値を求めて—中山間地に残る伝統的知識による地域活性化—」がまとめられ、広く公開した。今回は後期の事業として、「都市民と農山村をつなぐ仕事と学びの創造—農山村の環境と生活文化から学ぶ都市との交流—」と題し、ここに報告書を取りまとめたものである。

（伝統知研究会委員・森とむらの会前事務局長 阿部勉）

はじめに

伝統知は現代社会にいきる都市民にとってこそ重要で大切である。

学生の時（1975年～）、山梨県上野原の西原で雑穀調査を行っていた。アワ、ヒエ、キビ等様々な作物を栽培しており、中でも以前は各地でよく栽培されていたのが、その当時日本で3か所ぐらいしか残っていない幻のシコクビエを見られたのは感動であった。なぜ西原に残っていたのか。作る人がいたからである。数人の方が作っていて、その一人は「この種がなくなると消えてしまう。わしの代でなくなすわけにはいかない。種子を採るために毎年少しだけ作っている。」と語ってくれた。現在では、多くの方が栽培し、いろいろ工夫して販売までするようになった。伝統知は感動する。小正月の調査の時にモロコシの餅をいただいた。軽くサクサクした食感で非常においしかった。伝統知はおいしい。

北海道平取町二風谷で7年間（1998年～2004年）、東京近郊の小学生を中心とした参加者の「二風谷冒険学校」を約1週間行っていた時のことである。この地はアイヌの方が多く生活している。知り合いのアイヌの方をお願いしてアイヌ料理作りやこどもの山遊び、木彫り、チプサンケ祭り参加等の体験でアイヌ文化を学ぼうとすることを試みた。文字を持たぬアイヌ民族から教わるときに、親しいアイヌはメモを取ることを嫌がった。結局自分の体で覚えるまで繰り返し行うことが伝承者になれると感じた。教授法も様々である。異文化の伝統知を体験することは多数派の都市民にとって必須である。伝統知は視野を広げる。

タイのウタイタニー県バンライで環境学習を教員や学生、子供たちに行う場「パンダキャンプ」に私財を投じているシリポンさんと知り合ってから（2004年～）毎年8月にパンダキャンプで地元の小中高生や、教員、地域の方々にワークショップを行っている。この地域にはタイ族のほかに少数民族のカレン族、モン族、ラオ族等が住んでいる。シリポンさんと意気投合して少数民族の知恵を紹介して交流しようと計画した。アイヌ民族の知恵を紹介し、日本から食べ物もいくつか持って行って試食してもらったり、ラオ族の筍の漬物をいただいたり、カレン族のお餅をいただいたりした。伝統知は楽しい。多様である。午前中子供や教員向けの環境学習プログラムをいくつか紹介し体験していただいたが、午後の少数民族の知恵を知るワークショップには多数派のタイ族の人たちは興味を示さず帰ってしまった。日本もタイも同じように都市民にとってこそ伝統知を知ってほしいのに。

東日本大震災の後、運営委員会でいろいろ話した。結論は伝統知で生き残れる。エネルギー問題、コンピューター社会、物流、どこでも同じようなスタイル、画一的な教育・・・その中で持続可能な社会を考えると、その中心は伝統知である。

（特定非営利活動法人自然文化誌研究会 代表理事 中込卓男）

農山村の暮らしの幸せな暮らしと生業

生業（なりわい）とは・・・『農山村から幸せな暮らしを創る地道な仕事、理論を導くのは実践であり、実践を確認するのは理論である。（仕事の理屈）』

ここでは、調査対象となった各地域の生業などを紹介する。

- ①エコミュージアム日本村～源流の郷・小菅村
- ②長寿村の文化遺産～上野原市西原・桐原
- ③トランジション・タウン藤野、農業生産法人藤野倶楽部～相模原市緑区
- ④豪雪とお米～南魚沼市栢窪集落、清水集落

①エコミュージアム日本村～源流の郷・小菅村



モロコシ（あかもろ）の栽培



キビと里芋の栽培



ウズラマメ（ひよっと）の在来品種



畑で談笑しながら今年の作物の情報をもろう



雑穀栽培講習会の開催



エコミュージアム
日本村



炭焼き窯の手伝い



窯から炭を出して計量、箱詰めをする

②長寿村の文化遺産～上野原市西原・桐原



地元住民と交流しながら学ぶ



水車を使っでの搗精作業



地区で管理・使用される現役の水車



地元の食材が集められ販売されている

③トランジション・タウン藤野・農業生産法人藤野倶楽部～相模原市緑区



藤野居住作家たちによる陶器市の開催



地元住民、移住者や観光客でにぎわう



トランジ・シヨンタウンの活動が盛ん、藤野倶楽部にはローカル・シードバンクと専門書庫を置く



④豪雪とお米～南魚沼市栃窪集落、清水集落



残雪期に「修羅（しゅら）」と呼ばれるソリで木を引き出す技術を長老が伝授（栃窪）。



1 月末から 2 月にかけて、積雪は 4m 近くになる。高齢者の除雪技術は素晴らしい（清水）。



初夏、収穫したゼンマイをもみながら天日で干す。秋にはブナの原木ナメコがたくさん（清水）。



田植え教室で、最後にきれいに植え直す老人たち。秋の光を浴びる昔ながらの稲のはざかけ（栃窪）。

実証的都市山村交流プログラム

伝統知の聞き取りと再現・実証～ 山畑における大麦・小麦の栽培

木俣美樹男（植物と人々の博物館／日本村塾）

1. 麦秋を再現する

縄文式土器が発掘された場所なので、きっと縄文人が住んでいたのだろう。冬でも陽当たりがとてもよい丘の上にある畑をお借りした。丘の反対側の畑が霜で真っ白でも、ここの畑は霜がすぐ溶ける。昼間ならポカポカ陽気で、農作業が心地よくできる。冬作の麦類も栽培できるので、「ムギジ」と呼ばれる畑である。この地で、雑穀栽培講習会を開催して、冒険学校、ログビルダー講習会などと協働プログラムを実施してきた。特に、麦類の栽培による実証的交流について報告する。

関東山地の村々の主作物は、オオムギ（冬が表作）でした。オオムギは梅雨期の直前に熟すので、コムギのように収穫遅れで、梅雨期にかかり穂発芽することが少ないからと40年前に古老から聞いた。初夏に黄色く熟す麦類は冬雨・夏乾燥の地中海農耕文化の主要な作物である。日本に伝播してもその性質は変わらないので、麦秋は梅雨入り頃の季語だ。しかし、麦類の栽培は減少し、今日、この季語は死語と化す寸前なので、このために麦秋を伝統的な知識や技能により再現し、村に入ってくる観光客の自動車からも見えるようにした。

ムギジで、オオムギの収穫後は、コンニャク、ヒエ、モロコシ、トウモロコシ、ササゲ、アズキ、ダイズを作付していた。一方で、冬に陽当たりが悪い畑ハルマジは、春になってからジャガイモ、夏ソバの後に、ハクサイ、ダイコン、トウモロコシ、ダイズ、または雑穀類や陸稲を作付した。山間地の谷間の畑は、太陽が傾くと、陰になり、とりわけ冬の時期には日照時間が少ない。そこで、畑はできる限り陽当たりが良い南向きの山腹に作り、人家は谷間に建てることが多い。真冬には、室内でも水が凍る。家族の食べ物を作ることが優先されていたのだ。

オオムギで麦秋を再現するために、縄文人が住んでいた丘の上の畑を、守屋秋子さんに無理にお願いして借りた。彼女の夫、守屋竹治さんが生前に耕しておいでだった場所で、仮小屋にお話を聞きに訪ねたときは、いつもリポビタンDを飲めと勧められた。今回は、東京学芸大学で平田大介さんが栽培していたオオムギ品種（六条大麦）のほかに、モチオオムギ（団子麦）も栽培した。モチオオムギは、グレゴリー・マイケルさんが瀬戸内海の大三島で唯一栽培されていた在来品種種子を分譲いただいたものだ。この地でモチオオムギが栽培されていることは阪本寧男老師から聞いて知っていたので、エコプラスのプロジェクトで日本全国を徒歩旅行した際に、栽培農家から分譲を受けるように依頼したのであった。

オオムギは良く育ち、何十年振りかに栽培されたオオムギ畑を、若いころに麦作りを手伝った経験のある加藤増夫さんや教育長のお母さんらの古老たちが、懐かしく、麦畑を眺めて下さった。刈り取って、束ね、横棒に掛けて天日乾燥した。山鳩が啄ばみに来たので、秋子さんと黒澤友彦さんが防雀網をかけて下さった。その後、梅雨で、ほとんど晴れ間がなく、麦束の内側の一部は穂発芽してしまった。教育長のお母さんはこれを見て、収穫量が少ないだろうと、心配顔であった。

脱穀調整は穂を棒でたたいて、篩でふるってした。30年前に調査で訪れたネパールのシェルパ族になった気分であった。良い風が吹かず、風選は不十分であったが、それでも、18kg以上は取れた。大学農場ではもちろん脱穀機や精米機などを使用していたので、何時間もかけずにできる作業であった。でも機械は年に数回数時間しか使わず、こうした機械は個人には高価なので、買えな

い。小規模家族農耕は大きな農業機械をあまり使用しないので、伝統的に洗練された、手作業技術が将来も必要なのだ。地域社会の復元力（レジリエンス）の強さは伝統的な知識体系・技能が継承されることによって高められる。

丸麦への加工は、日本村塾自給農耕ゼミ第2回として参加者を一般募集して、上野原市西原のびりゅう館の水車を使用させていただき、中川智さんに使用法をご指導いただいた。搗精した丸麦は参加者の皆様に配った。オオムギの粥はおばくと呼ばれ、伝統的には主に昼食として調理されてきた。

付録参考資料

1. 栽培

播種： 2014年10月16日。

畑はハンドトラクター50年物で耕起してもらい、等高線に添って畝を立てた。畝幅は60cm、長さは7~9m、約0.5a。9畝にオオムギを、1畝に団子麦（モチオオムギ）を、条播した。

施肥： 市販の有機100%顆粒状肥料、基肥3kg、追肥1kgを用いた。

麦踏み： 12~2月の間に3回行った。

防雀網： 2015年4月17日、24日に張った。穂は出揃っていた。

干場： 6月1日に構築。

刈取り： 6月5日

2. 調整

脱穀： 7月12日、15日

搗精： 7月25日、上野原市西原の水車。日本村塾自給農耕ゼミ第2回

3. 調理 おばくの作り方

材料：まるむぎ、水車で精白したオオムギ粒

水、必用に応じて塩少々

季節の野菜、ダイコン、インゲンマメ、ジャガイモ

味噌、ネギ、ノビル

調理法：

1. 水洗し、2時間水に浸す。

2. 大なべに、たっぷりの水で、3~4時間弱火で煮る。必要に応じて差し水をする。

3. インゲンマメは始めから、あるいは途中で加え、ダイコンやジャガイモは仕上がり時に適度に煮えているように、終わりころに加える。

4. ネギまたはノビルは細かく刻み、味噌と和える。

5. ネギ味噌、ヒル味噌をつけて食べる。

<参考論文> 木俣美樹男ら 1978、雑穀のむら一特に雑穀の栽培と調理について一、季刊人類学：9（4）：69-106.

写真記録 (2015年):



4月17日、防雀網の準備、出穂後のオオムギ（六条大麦）



5月4日、オオムギ（六条大麦）は登熟中



5月22日、遅れて出穂した団子麦、6月5日、六条大麦完熟



7月12日、天日乾燥、7月15日、脱穀



7月25日、上野原市西原の水車、搗き臼で精麦



搗精の程度、左は挽き割り、右は丸麦

2. 大麦の加工調整

大麦を収穫、株刈した束を乾燥した後、7月に2回に分けて穂の部分を棒でたたいて脱穀、天日乾燥した。粉がついた状態の麦粒を上野原市西原のびりゅう館わきの水車で粉摺り、搗精を行った。自給農耕ゼミ第2回として参加者を一般募集し、西原在住の中川智さんに水車の使用法について指導を受け、雑穀や麦などの栽培法について座談会を行った。搗精後の丸麦は、自然文化誌研究会の会員や小菅村在住の希望者20余名に配布（各250か500g）し、水車搗精の丸麦は珍しいので、喜ばれた。また、環境学習セミナーなどの際におぼくとして試食に供した。なお、団子麦は収穫量が少なかったため、2016年に加工することにして、収穫した種子を、中川さんが2015年秋に西原の畑に播種した。

3. 山畑の等級と大麦・小麦の栽培

山間地は狭隘な谷間の南向き斜面に、あるいは尾根の下あたりに畑を拓いてきた。斜面の向きや傾斜角度、標高、雨風の道、土質などに加えて、季節に従う太陽の高度で、その場所の微気象は著しく複雑に変化している。

小菅村の畑は狭隘、急峻なので、段々畑にはしていない。したがって、下から土壌をもち上げながら耕起する。傾斜地の不安定な足場に加えて、土壌をもち上げる労力がかかり、平地よりも作業が大変である。土壌は雨で下に向けて浸食されているので、土壌を上に戻して流失を防いでいるのだ。農耕機械は急斜面では横倒しになる危険があり、せいぜい家庭用程度の小型機しか使用できない。平地の耕地では比較的均一な微気象の下で大型農業機械による耕作が可能であり、栽培管理は容易である。山畑では生産効率を求められても無理なことで産業にはなりにくい。第2次世界大戦中の食糧増産、米の配給制度に関わり、山村でも無理に水田を造成したが、日照は少なく水温も低いので、良好な生産はできず、大戦後に水田は中止になった。山村は古来、畑作を続けてきた

のであり、水田ができないから畑作をしているのではないことを認識すべきである。森林面積が多い中山間地では一般に小規模家族農耕としての畑作が適当だ。

山畑の良し悪しの等級は、このために冬作である小麦・大麦の生産量に基準が置かれていた。守屋秋子さんの話では、冬も陽当たりが良く大麦・小麦が栽培できるところはムギジと呼び、その生産量が多いところは「お上でん」、少ないところは「中・下」ということだ。麦類が栽培できないところは、「ハルマジ」と呼び、春作でジャガイモやソバなどを栽培する。中組集落の一等地はもう少し山中にあるそうで、昔は麦がたくさんとれたそうだが、今では少し遠いので放棄されている。写真の畑はとても陽当たりが良くても、収量からして二等地だそうだ。集落周辺にも、シカやサル、イノシシにツキノワグマが出る。畑入口のクリの木に登って、枝を折りクリを食べた熊は、その後射殺された。神社わきの畑を荒らしたシカも、神社に銃はむけられないので、追い立てられてから、射殺された。今では、人間に似ていて射殺したくないサルまで、その利口さゆえに手につけなくてはならなくなっている。自然は、過疎高齢化で、人口も減り、不耕作地が増えた山村に急速に戻りつつある。自然と対峙して、競合・共存のラインを維持してきた山村は後退している。農耕は電気柵の中でしている。先日は柵の網越しに、奥秋和俊さんからシイタケをいただいた。まさにご厚意なのだが、まるで檻のなかのサル気分であった。

本年（2015年秋～2016年初夏）は、オオムギ2品種（2015年と同じ）、小麦2品種（南部小麦、ゆきちから）を、ムギジ2か所で栽培してみた。六条大麦は雪や霜がすぐに解けるほど陽当たりが良い畑に10月19日に、団子麦は冬に降霜が多く、雪も融けにくい畑に、11月28日に播いた。小麦2品種はともに前者の畑に、12月2日に播いた。六条大麦以外は非常識に遅い時期に播種したことになり、守屋さんからは絶対に生育しないと折り紙がついた。

ところが、予測に反して、オオムギもコムギも下記の写真にあるように、生育に差はありながら、収穫が見込めるようになった。極端に遅まきでも、陽当たりが良いムギジでは、秋子さんがいたく驚いたのだが、何とか生育できることが分かった。「あんなに馬鹿にしたのに、収穫できそうだね」と言われた。

写真記録 2016年：



初春の団子麦の畑は雪に被われている。野生動物から作物を守るために柵が設置され、上部はサルが登らないように、電流が流されている。うっかり触るとかなりしびれるほど痛い。左手東方の谷間が雑穀栽培講習会の畑、陽が昇る奥の丘上が六条大麦と小麦2品種の畑。



上記写真と初春同日に写した麦畑。左下はすでに雪が融けている六条大麦の畑、右下は融け始めている小麦の畑。2016年5月下旬、同じ畑、網掛けしてあるのは登熟した六条大麦と、手前は乳熟期の小麦。

4. 伝統的知識と技能を継承する

現代、農業機械が発達しても、山地で大型機械は使用困難で、伝統的な小規模家族農耕を生業として持続することが望ましく、産業にはしなくてもよい方策を統合的に検討すべきである。このために、複数の職業（観光、林業、水産業、環境学習、キャンプ場、土建業、近隣都市の会社員など）に関わりをもち、生業を補う必要がある。ただし、都市と異なって、それなりに濃いコミュニティが存続しているので、贈答文化が温存され、慶弔・祭り以外にはさほどの消費に流されず、簡素でも豊かな暮らしが成り立ち、持続可能な地域社会の良い伝統は山村に見いだされる。

少子高齢化の重要課題は、伝統的知識・技能が伝承困難になっていることだ。岡部良雄さん夫妻が言うとおりに、80歳も半ば過ぎの「戦中派」、せめて青少年の時に農耕経験がある人々でないと、直接体験による伝統的知識体系は持ち合せてはいない。喫緊の課題として、次世代が体験的に教を乞い、学ばないと、復元できない程に失われてしまう時期にある。IT技術や生命工学の時代に、科学的知識体系のほかに伝統的知識体系のような遅れたものは不要だと黙殺する人々が大半だが、しかし、持続可能な社会を再創造するように移行（トランジション）するための高い復元力を支えるのは、伝統的知識・技能の体系である。

都市でも市民農園を拡大することによって、生業としての小規模自給農耕は可能で、家庭菜園やコミュニティー・ガーデン、クラインガルテン、ダーチャなど欧米でもいろいろな呼称されていますが、家族レベルの食料自給を高めることはできる。言い換えれば、日本の農家の3%が専業、97%兼業であるのに、行政策は3%に重きを置いている。TPP対応を考えているのだろうが、圧倒的多数に対する、もう一つの重要政策を求めたい。近い将来、多くの人々を飢餓に陥れ、不幸にすることのないように、市民の皆様が自ら生業、小規模家族農耕、伝統的な知識・技能体系を継承するように強く要請したい。どうした行政策を創作するのは市民（あなた方）にかかっている。将来の幸せも不幸も、その結果は市民の教養の高さと行動力の強さに依拠するものだ。



東京都小金井市のひがし市民農園は応募が多かったにもかかわらず廃止された

兼業農家は、自家用が余れば地域市場、道の駅やファーマーズマーケットなどに出荷するか、契約家庭に供給できる。契約家庭は「援農」を楽しむことができる。また、市民農園推進法も整備されてきたので、自治体行政が仲介して、不耕作農地を市民農園にすれば、実質的に潜在自給率も高められ、食料安全保障の効果がある。しかし、都市民の多くが農耕・園芸をしたいにもかかわらず、市民農園は応募倍率がとても高く、容易に借りられない。抽選にうまく当たっても、2年間だけなので、狭い面積で、土壌改良や長期的な作付計画ができない。

よく頑張っている専業・兼業農家もあるが、収穫もしないクリ、管理もしない庭木などで、除草剤ばかり施用し、耕運機をかけても何も植えない農地など、明らかに課税逃れをしている農地が都市部では散見される。山間地では一層高齢者ばかりで、当然跡継ぎもおらず、耕作放棄地が広がり、野生が里に戻ってきている。これでは跡継ぎのいない農家も、農耕・園芸好きの、土地を持たない都市民も、あまりに不幸だ。行政策で問題の解決はできるのに、それを怠っているのは、このくにの大きな不幸である。過去に、何度も飢餓の歴史があったのに、そのことを忘れ去り、輸入食糧で賄うことで良しとしている行政策作成者も市民も、食料は金では買えない事実を肝に銘じず、備えもしないで悲惨な未来をどう回避するのだろうか。治（平和、食糧輸入）にいても乱（戦争、災害、飢饉、パンデミック）を忘れないのが為政者で、為政者が怠慢なら、市民は自らか家族や地域社会を守らねばならない。

山岳、山林が多いこのくには、畑作も重視すべきで、稲作一辺倒、減反生産調整、米さえ守れば、ということでは、食糧安全保障はまったく不備である。武力がなくても、金力によらなくても、市民は少しでも食料を自給しなければ、飢えるばかりか、文化的にも、精神性の衰退によって自壊してしまう。私たちは、歴史事実を良く学び、深く考える秋にいる。私は国内外の農山村で、多くの調査旅行をし、聞き取り資料や収集した植物を科学的に分析し、たくさんの論文や随筆などを書き、公の雑誌でも正直な見解を述べてきた。日本の民族文化を衰退させて、精神的にも衰微させ（低い自尊感情）、自殺者（深い孤立）や犯罪者（低い倫理性）を増加させるような行政策に深い反省を求めたい。農耕・園芸作業はお腹も満たすが、心も豊かにする。農山村の多面的・多機能から学び、人生を素のままの美しい暮らしで、幸せにしてほしい。



1985年小菅村、新嘗祭への献上アワの播種



雑穀栽培講習会 自給農耕セミナー



雑穀栽培見本園



エコミュージアム日本村／植物と人々の博物館、森とむらの図書室（小菅村中央公民館内）



雑穀街道展示と森とむらの図書分室（相模原市緑区、農業生産法人／藤野倶楽部内）

新潟県南魚沼市における栃窪・清水両集落を舞台にしたプログラムの展開

大前純一（特定非営利活動法人 ECOPLUS）

1. 休日農業講座「田んぼのイロハ」を通じた無農薬天日はざかけ米の栽培

最高級の魚沼コシヒカリの産地として知られる南魚沼市の魚野川西岸の丘陵地にある栃窪集落を舞台に、本組織は、各種の体験活動が続けてきた。2011 年度から緑化推進機構の支援を得て、特定非営利活動法人自然文化誌研究会とともに、モデル的な都市山村交流プログラムとしての体験活動が続け、参加者からアンケートを取るなどして、その有効性可能性を探ってきた。その一部を紹介する。



春先の田植えには、六角と呼ばれる枠を使って筋を付け、そこに苗を植えていく。無農薬で除草剤を使わないため、手作業での草取りが必要になり、それもプログラム化した（左から 2 枚目）。収穫時は手刈りしてはざにかけ、2 週間近く天日で乾燥させる。乾燥後の収穫祭では、次年度に向けた田起こしを三本ぐわで行い、さらに地域の酒屋での仕込みも組み込んだ（右端）。

プログラム参加者は、メーリングリストやウェブサイトなどで行い、口コミで輪が広がった。当初は日本人だけだったが、昨今は日本への留学生や海外からの参加者も増えてきている。単に苗をある場所に置くだけの作業体験ではなく、1 泊 2 日での座学も含んだプログラムとしたことで、農薬に対する意識、食の安全性、さらには稲作の経済学、集落の存続可能性についても幅広い議論が展開されるようになってきている。

2. 雪掘り道場

日本有数の豪雪地である南魚沼市のさらに山の中にある清水栃窪両地区では、厳冬期には積雪が 4m にも達する。家全体が雪に埋もれるような状態になるので、除雪作業を「雪掘り」と呼ぶ地域である。住民にとっては連日の除雪作業は苦役でしかないが、都市部住民にとっては、新しい形の雪の中でのアクティビティとなる。毎年 1 月下旬か 2 月上旬に、都市部の人々を招いた「雪掘り道場」を開催した。地域住民が、「コシキ」と呼ぶ木のスコップを使った除雪方法などを実演し、屋根だけでなく、落ちた雪で埋もれた 1 階部分を掘り出す作業を指導した。



対象としたのは、高齢者の単身世帯など。除雪作業をさせてもらうだけでなく、室内に招き入れてもらって、昔からの暮らしの変遷なども聞かせてもらうことが出来た。また雪に閉ざされる間のための保存食としての多様な漬物、干物を使った郷土料理をいただくことも出来た。

この数年は、社会の現状に触れる「サービラーニング」の一環として正規科目として雪掘り活動を取り入れ、それがきっかけで学生が集落のコメを大学の同窓会で販売するなど、首都圏の大学との新しい交流も始まっている。

環境学習セミナー・シンポジウム

調査研究の成果を順次、公表するとともに、他地域のすぐれた実践事例から学ぶ機会として、参加者を一般公募して環境学習セミナー（プレシンポジウム）を5回開催してきた。さらに、3年間にわたる交流実践と調査研究の成果を踏まえて、2017年4月15日（土）～16日（日）に、神奈川県藤野町の「篠原の里」を会場に、総括となるシンポジウムを開催した。

『環境学習セミナー』2014年11月8日（土） 於：山梨県小菅村中央公民館

「都市民が学ぶ山村の伝統的知識～トランジション・タウンと山村をつなぐ雑穀街道」

「トランジション・タウン藤野のローカルバンク」
末村成生さん（TT藤野お百姓クラブ）

「上野原市鶴川流域の地産品新興」 白井誠一さん（びりゅう館）

「小菅村における雑穀の商品開発」 黒川文一さん（小菅村役場）

「南魚沼市栃窪での実践」 大前純一さん（NPO法人エコプラス）



『環境学習セミナー』2015年10月10日（土） 於：山梨県小菅村中央公民館

「環境学習の源流から未来へ」

第一部 源流を探る・ふりかえる

探検部草創期（1975年頃）

子どものための冒険学校・五日市時代（1988年頃）

大滝村・エコミュージアム（1990年代）

タイ環境学習キャンプ（1990年代）

ぬくい少年少女農学校～ちえのわ農学校（2001年頃）

小菅村～現在（2004年頃）

中込卓男さん 柴田一さん

佐藤雅彦さん

小川泰彦さん 山中進さん

中込貴芳さん

菱井優介さん

黒澤友彦さん



第二部 どのような未来へ行くか？

基調講演 亀井雄次さん（小菅村商工会・観光協会・自然文化誌研究会理事）

塚原東吾さん（冒険探検部創設者）

木俣美樹男さん（自然文化誌研究会学芸大学探検部創設者）

『環境学習セミナー』 2015年11月14日(土)～15日(日) 於：山梨県小菅村中央公民館

「明日の小菅村を探る～持続可能な地域社会の再検討」

「源流の郷小菅村」 佐藤英敏さん（小菅村教育長）



「全国のトランジションタウン活動と藤野の例」
小山宮佳江さん（NPO法人トランジション・ジャパン共同代表）

「日本で最も美しい村」連合が目指す地域社会の未来
杉一浩さん（NPO法人「日本で最も美しい村」連合 常務理事）



講演： 地方消滅論の再検討 山下祐介さん（首都大学准教授）

（翌日の体験）「こんにやく体験と掛け軸畑」（橋立地区：木下新造さん）



『環境学習セミナー』 2016年6月25日(土) 於：山梨県小菅村中央公民館

「山村の生物文化多様性と豊かさ～都市住民が山村住民から学びたい生業＋職業＝楽しみ
の人生」

演題：「地域を知る、生きる、形作る」
山下祐介さん（首都大学東京・准教授、地域社会学・環境社会学）

地域を守る人とはだれなのか、誰がどういう形で、その土地の歴史や文化を継承していくのか、白神山地の山村からを考える。



演題：「山の恵みに彩られた山村の暮らし」
白水智さん（中央学院大学教授、日本史・山村史）

山には多くの資源があり、住民はそれを活かす多様な知識や技術をもって、豊かな暮らしをしてきました。大震災に見舞われた長野県栄村（秋山郷）における文化財を活かした復興支援活動についても紹介する。



『環境学習セミナー』 2016年9月3日(土) 於：山梨県小菅村中央公民館

「自然と暮らす知恵と技能を学ぶ。山村の生活技能・環境学習（冒険学校）」
「暮らしを創造する生きる力を生む冒険、自然体験」

佐々木豊志さん（くりこま高原自然学校）
山村で自然学校を経営ながら、2008年「岩手宮城内陸地震」に遭遇して非常時の環境学習（サバイバル）の意味を、身をもって示した。さらに、この経験を活かして、東日本大震災が起こった時には、災害ボランティアセンターを立ち上げ緊急支援体制を構築した。最近、世界的にも、自然学校がいわゆる「デイズニー化」しており、冒険心まで演出されることを危惧している。幼少期の自然体験の重要性から森のようちえん、さらに、自足可能な暮らしを想像するために森林資源利用から木質バイオマス、馬搬など復権と取り組んでいる。



「小菅村の自然、知恵と技能」
木下善晴さん（建設業・小菅村橋立地区）
加藤源久さん（自然ガイド・小菅村東部地区）

伝統知シンポジウム

「農山村の環境と生活文化から学ぶ都市との交流」

日時：2017年4月15～16日（土日）

場所：神奈川県相模原市緑区（旧藤野町）の「篠原の里」

主催：NPO 法人自然文化誌研究会、NPO 法人エコプラス

共催：エコミュージアム日本村（トランジション小菅）／ミュージゼス研究会、トランジション・タウン藤野、トランジション・ジャパン

協力：東京学芸大学環境教育研究センター

後援：小菅村、農業生産法人藤野倶楽部、藤野観光協会

助成：公益社団法人国土緑化推進機構「緑と水の森林ファンド」中央事業助成

伝統知研究会委員：中込卓男（自然文化誌研究会代表理事）、中込貴芳（同副代表理事）、黒澤友彦（同事務局長）、小柳知代（東京学芸大学講師）、藤盛礼恵（東京学芸大学非常勤講師）、木俣美樹男（東京学芸大学名誉教授）、高野孝子（早稲田大学教授）、大前純一（エコプラス事務局長）、阿部勉（森とむらの会）

趣旨：

日本の農山村、とりわけ山間地の集落では、過疎高齢化の影響が深刻となり、長年受け継いできた自然と調和した伝統的な暮らしが消滅する寸前に立ち至っている。一方で、何百年、時には千年以上にわたって暮らしを維持してきた集落に蓄積されてきた伝統的知識体系や技能には現代的にも高い価値があり、「持続可能な社会づくり」には不可欠であることが明らかになってきている。

自然だけではなく、身近な土地からさえも切り離されて世代を重ねた都市部の住民にとっては、この知恵や技能を総合的に体験し、自らの暮らしの組み立てを考える機会が極めて有効である。自然を単に体験するだけでなく、その地に育まれた生活文化全体を題材とした都市との交流は、これからの農山村と都市住民の交流の新たな姿として探求される必要がある。本事業では、3年次計画で実際の伝統知学習プログラム展開をしつつ、この新たな交流実践の姿を描き出す試みをしてきた。

本シンポジウムでは事業成果を報告し、さらにこの成果を社会的に位置づけるために他の先進事例も紹介し、生活における伝統知や技能の大切さとその継承による、健全なライフスタイルについて、農山村と都市からの参加者ともにゆったりと話し合いたい。

幸いなことに、開催地の藤野は日本のトランジション・タウン活動の中心であり、シュタイナー学校やパーマカルチャー・センターもある。素のままの美しい暮らし（sobibo）へとライフスタイルを変容するために学ぶための良い実践が蓄積されている。これらの文化的財産をもとに、これからの私たちの生活や人生の先行きを明るく直観できるような統合概念をともに発見し合いたい。

（副題：現代文明の移行と伝統知・生業～第39回環境学習セミナー）

4月15日（土）

基調報告

高野孝子さん（早稲田大学教授）「伝統知を生かした交流と学びの場」

伝統知研究会報告

大前純一さん（エコプラス事務局長、新潟県南魚沼） 「苦役を学びに」

黒澤友彦さん（自然文化誌研究会事務局長、山梨県小菅村） 「伝統知～知恵と効率化」

ポスター・セッション

話題提供

設楽清和さん（パーマカルチャー・センター代表）「新たな持続可能な文化の生成について」

高橋靖典さん（トランジション・タウン藤野、藤野倶楽部）「境界のまち「藤野」の社会的な価値」

渡辺隆一さん（信州大学特任教授） 「信州の自然と農と教育」

座談会風の総合討論・交流会

4月16日（日）

シンポジウムのまとめと藤野まち歩きの紹介 司会 末村成生さん（トランジション・タウン藤野）
「藤野サスティナブル・スポット・ツアー」

藤野という里山地域に根づきつつある持続可能で身の丈に合った暮らし。その具体的な営みを体感できるスポットをぶらっと見学してみませんか。パーマカルチャーやトランジション・タウンの実践現場をご案内します。



「伝統知を生かした交流と学びの場」

高野孝子さん（早稲田大学教授）

日本の農山村の多くでは、自然から持続的に恵みを取り出す知恵や、自然に近い生活から生まれる哲学や洞察が長年受け継がれてきた。近年、とりわけ山間地の集落では、過疎高齢化に伴い、そうした伝統知やライフスタイルそのものが、集落や人々とともに消えようとしている。

自然文化誌研究会とエコプラスを中心とした調査研究チームは、何百年と暮らしを維持してきた集落の技や知識には、「持続可能な社会づくり」への示唆が豊かに残されていることを前提として、都市と農村住民の交流プログラムを実施し、過去3年に渡ってデータを収集した。

それは、単なる「自然体験」ではなく、その地に育まれた生活文化全体を題材とした都市との交流であった。そうした機会を通して、参加者が伝統知についてどのような価値を見出したか、都市であれ農村であれ、持続可能な社会づくりの手がかりとなるかを考察した。

ここでは研究会の全体の報告として、幾つかのプログラムならびに調査結果の概要を報告し、見えてきた課題と可能性について言及する。



「苦役を学びに」

大前純一さん（NPO 法人エコプラス 事務局長）

私たちが活動をさせていただく新潟県南魚沼市の山里は、4mを越す雪が積もる豪雪地帯である。毎朝のように玄関前に腰までの雪が積もり、その除雪だけでもくたびれる。夏場、山の斜面に広がる美しい棚田は、田んぼよりもあぜの傾斜面の面積の方が広いといわれ、村人は6月から9月まで、あぜの草刈りに追われる。どちらも「苦役」でしかない。その雪掘りは都会の人間からすると、スキーとはまったく違ったアクティビティになる。草刈りで絵文字を描けば「草刈りアート」だ。参加者は、体を動かし、蓄積した技を教わり、人々が何百年にもわたって積み重ねてきた暮らしを学ぶ。そこから改めて都市化し近代化した私たちの暮らしを見つめ直し、持続可能な未来を考える。わずか数十年しか経ていないいまの私たちの暮らしの姿をよりよくするために、改めて足もとを見直すときだ。



「伝統知～知恵と効率化」

黒澤友彦さん(NPO 法人自然文化誌研究会 事務局長)

「知恵」は身に付けることであると思う。小菅村に移住して12年、豊かな自然と文化、伝統的な知恵に囲まれているという実感があり、訪れる人もそう言う。自分の日常を考えてみると、「生業」をこなしながら暮らしている＝職業である案内人だけでなく、プレイヤーという側面もあり、正直、田舎暮らしもなかなか忙しい。だが、自分自身がプレイヤーであり、身の丈に合った部分をこなしていくことは回数を重ねるごとに自信を生み出すものでもあると思う。

自分の「生業」に関して本音を言えば、実は楽しみではない、早く片付けたいと思っているのが「生業」であったりもする。

私個人の日常で言えば「生業」はこんなところ。

- ・薪割り（薪ストーブ燃料）～チェーンソー、斧の活用、保存方法、冬支度
- ・畑作～生鮮食品、穀物類の確保
- ・狩猟（趣味と義務）～山を知ること、解体作業、蛋白源の確保。副次的に、有害鳥獣駆除による森林の保全(側)

日常生活の中で大きく3つの生業を常に抱えており、これは自分自身と自然とをつなぐ接着剤。同時に、楽しみというよりはなるべく作業を効率化することにより。熟練度が上がり、余暇が増える。仕事と捉えずに、仕事の合間に、日常の合間にて行うこと。すべてに共通することは、肉体を活用することと、自然と関わることなので、健康維持という側面も持っている。健康維持を考えれば、自動的に肉体を鍛え維持すること、効率化を常に回り頭を働かせるということで知恵を磨けるという環境＝システムに包まれている。実は生業によって、伝統的な知恵の習得がなされている訳で、感謝すべきものであるということが、自然への感謝の気持ちであろうか。

想定外の災害や、未曾有の自然災害が起きる可能性のある中、伝統的な知恵を身に付けておくことは必須であ

ると思う。小菅村のような山村にいる限り、電気が止まろうとも、ガスがなかろうとも、命をつなぐことは可能だと思う。自分自身の手の届く範囲にエネルギーや食材が存在するからだ。農山村の伝統的な知恵を継承することや学ぶことは、農山村の維持のためではなく、生きていくための知恵を学べる場所として、ぜひ活用していただくのが農山村と都市の双方にとって良いのだろう。そしてそのようなプログラムをこれまでに展開してきた。

日常的にかかわる全ての伝統知をやりきることは難しいので、個人で必要な知恵を考え、厳選していく必要もあるだろう。



「信州の自然と農と教育」

渡辺隆一さん(信州大学教育学部)

「みすず刈る信濃」といわれる長野県は日本の屋根である。県歌、信濃の国に詠われているように4つの平らに住む人々は豊かな自然に恵まれ農業も盛んで、豊かな自然を背景に農を基本とした多様な山村文化が各地に見られた。長野市の近郊でも、戸隠村は神社信仰とそばが、鬼無里村では麻や雑穀の栽培が盛んであり、ブナの森に囲まれた野沢温泉村では正月にブナのやぐらを組んだ盛大な火祭りが今でも行われている。

しかし、現代社会はこの信州においても経済発展が主題であり、自然へのまなざしは極めて少ない。私たちの生活は表面的には金銭の経済であるが、深層では地域の自然や文化を土台にしているのであり、それらを踏まえずには「持続可能な社会・地域」は成立し得ない。世界経済に遠い中山間地においては急速な過疎化が進行しており、特に子ども達の数減少し、全校数十人という中学が多数ある。すると小中学校が廃止されて、村は急速に過疎化する。これはやむをえない事なのであろうか。

かつての長野県の山間地では子どもが数人の集落であっても分校などの名で小学校を維持し、学校を核とした地域が維持されていた。戦後の復興もそうした教育の力によって支えられて来たといってもよい。環境教育を

(1977 年以来) 永らく行ってきてわかったことは、様々な環境問題を紹介し地球の危機を訴えても個人の行動にはなかなかつながらない、心と体の成長期である小学生ほど環境に関心が高く、また危機感を持っていること、の 2 点である。とすれば、子どもは地域の中で遊び、大人はその中で地域の課題を提示するという共育の仕組みを再構築するしかないのではないかと思う。近年、子どもたちの体験が重視されるようになってきたが、単に自然に触れさせるだけではなく、自然体験を地域課題として社会化することが大切である。小学生でも現地でギフトチョウを見てその素晴らしさに感激するとともにその環境や地域が開発や過疎といった社会関係の中にあることを見出し、自分たちに何ができるかを考え始める事例がでてきている。中学年以上になれば自然や環境を論理的に見る力もあり、地域や自然を様々な関連の総体として認識できるようになります。そこでは、自然も社会も文化もみな関連していることを直感的に理解できるようになっているのでしょう。野外での体験は、理科学的な自然観察に終わるものではなく、確実に地域の課題学習につなげることができる優れた教材です。地域の自然を個々の自然物として見るだけではなく、その自然が育ててきた地域の暮らしと文化、そして地域の歴史、さらに人類が歩んできた進化の過程まで大きな歴史の流れとして、過去を学ぶことが、未来にどんな地域を創造してゆくのかの知恵と工夫の源泉になるのだと思います。



「新たな持続可能な文化の生成について」

設楽清和さん（日本パーマカルチャーセンター）
パーマカルチャーとは持続可能な生活をベースにしながらか地域コミュニティとそこに生じる文化を生成していくことを目指しています。グローバリゼーションによって地域の文化は自然と共に破壊され、人は自らのアイデンティティーの拠り所と、生活の安定を失ってしまいました。地域の特性とそこに生きる人々の地域の資源を用いて生活のレベルを高めていく創造力により築かれてきた文化の街を見直し、それらが内包する様々な知恵や技

術を未来に向けて生かしていくことが、これから私たちが取り組むべきことであると考えます。パーマカルチャーを通して見いだすことができるこれらの文化の様々な特性を明らかにすると共に、これらを生かして地域づくりを行っていく実践についての報告を行いたいと思います。



「境界のまち「藤野」の社会的な価値」

高橋靖典さん（トランジション藤野・農業生産法人 藤野倶楽部）

藤野は首都圏からみると、車でも電車でも約 1 時間—1 時間半。都内で仕事を持っていても、なんとか通勤ができる場所に位置しています。地形としては中山間地域であり、平地の少ない山間の地域で、大規模な農業をするには不利な場所です。移住や経済という視点からこの地域を見た場合には、本当に奥まった田舎までは移住できないケースで、消費地でもある首都圏とのつながりも持った上で暮らせるエリア、自然の多い田舎エリアへの境界線のまちとも言えるのではないかと考えています。そんなまちで考えられる役割と取り組みについてお話しさせていただきます。

藤野現地ツアー案内



小山宮佳江さん（NPO 法人トランジション・ジャパン 共同代表／トランジション藤野メンバー）



末村成生さん（トランジションタウン藤野お百姓クラブ）

実証的都市山村交流プログラムの評価・検証

はじめに

伝統知を活用したプログラムでのアンケート調査や聞き取りから、都市住民との交流促進に、伝統的な技や知識を活用出来る可能性が裏付けられた。伝統智プログラムとその背景と、普段の暮らしのつながりも見出してもらうことができ、都市住民を含めた形での伝統智の継承の方向が少しずつ見えてきている。また、講師を務める地域住民の中には、外部との交流を通じて、自らの地域への誇りを高め、さらに多くの伝統知を披露するという効果も見られた。

1. 都市山村交流プログラムの実証的評価・検証—統計解析およびテキスト分析の結果から

伝統知研究会委員 小柳知代

本事業では、伝統知を活用した様々な都市山村交流プログラム(以下、伝統知プログラムとする)を実施してきた(表1)。ここでは、プログラムの参加者を対象としたアンケート調査(表2)の結果をふまえて、伝統知プログラムの重要性やその具体的な効果について紹介する。分析の結果、全体として伝統知や伝統的技能を体験的に学ぶプログラムへの高い評価が認められ(図1)、都市住民との交流促進に伝統的な技や知識を活用できる可能性を示すことができた。単に都市住民が農山村に来て自然体験をするだけでなく、伝統知プログラムに参加することで、今現在の日常的な暮らしの意味やあり方を問い直すきっかけになっていると考えられる。また、プログラムの講師を務める農山村の住民にとっては、都市住民との交流を通じて、自らの地域への誇りをさらに高め、多くの伝統知を披露するという効果も見られた。その一方で、都市住民にとっては、伝統知プログラムを通じた学びや気づきを、都市での暮らしにつなげて応用していくことが困難であることも分かってきた。今後の課題として、日常的な暮らしの中での具体的な行動の変化に結び付くような学びや気づきを生み出す伝統知プログラムを考案していくことが求められるだろう。

表1 伝統知を活用した都市山村交流プログラム

活動主体	実施プログラム
自然文化誌研究会	星空観察会 まふゆのキャンプ 味噌づくり 野草の天ぷらとお茶摘み むらまつりキャンプ 雑穀栽培講習会 大麦 学大実習

エコプラス

田んぼのイロハ
 (田植え、草取り、稲刈り、収穫祭)
 山菜講座
 子ども夏キャンプ
 雪ざんまいキャンプ
 お茶づくり
 阿見町森整備
 立教大雪掘りサービスラーニング
 生きもの復活大作戦

表2 アンケート調査内容の概要

質問項目と回答方法	質問内容
A. 参加者属性 (選択回答)	A-1. 現在の居住環境や農村プログラムへの参加経験
B. プログラムの評価 (選択回答+記述回答)	B-1. プログラムの総合評価 B-2. 自然と暮らしへの理解の深まり B-3. 伝統的な知恵や技術の大切さ B-4. 気づきや知識を暮らしに活かせるか B-5. 農山村への興味関心が高まったか
C. その他 (記述回答)	C-1. 印象に残ったこと C-2. 学びや発見 C-3. 環境と調和した公正な社会を作るヒント C-4. 感想など

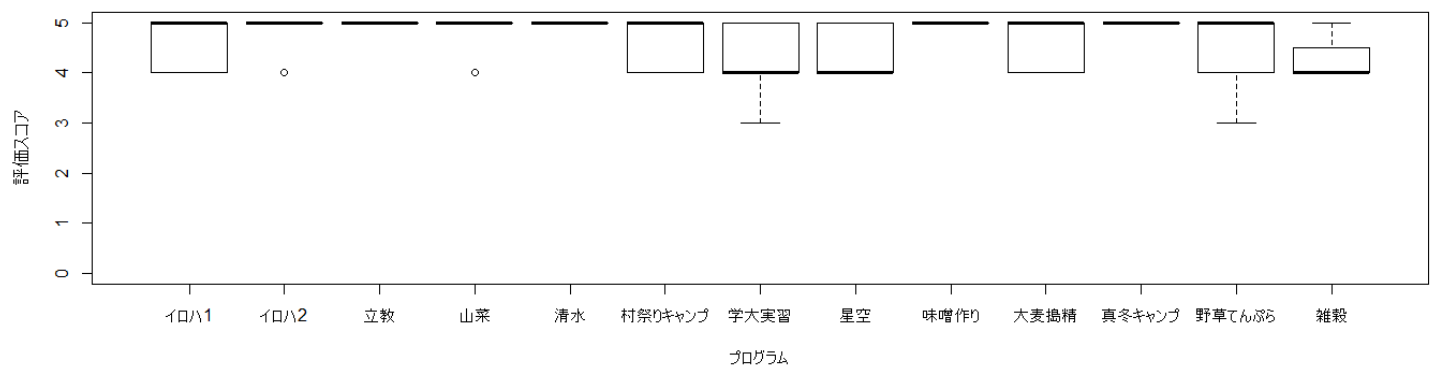


図1 主な伝統知プログラムの総合評価スコア (最大値 5, n = 209)

2. アンケートの統計解析およびテキスト分析に基づく考察

1) 環境学習プログラムの効果測定の解析

自然文化誌研究会と ECOPLUS が、「農山村の環境と生活文化から学ぶ都市との交流」(2014.7～2016.6) の課題に即して実施した環境学習プログラムへの参加者アンケートの結果 2 年分の共通調査票を統合して、参加者の大まかな特性を把握するように試みた。記述統計(n=260, SPSS Statistics ver.21.)およびテキスト解析(n=331, SPSS Text Analytics for Surveys ver.4.0.1)を使用した。なお、テキスト解析にあたっては、英語で記載された 12 名分の回答を和訳して用いた。

農山村に居る人々の類型を 4 つに整理してみよう。Ⅰ 農山村住民：Ⅰ1 農山村で暮らすことに意義を見だし、誇りをもっている人、Ⅰ2 農地や山林資産などがあり都市に出られない人、Ⅰ3 都市に出る気力と能力がない人。Ⅱ 農山村への帰郷民 (U/J ターン)：親の高齢化による介護、都市での暮らしが困難、退職などで、帰郷した人。U と J では農山村への距離に差がある。Ⅲ 新住民 (I ターン、O ターン)：Ⅲ1 農山村で暮らすことに意義を求めて、都市から移住した人、Ⅲ2 都市での暮らしが諸般の理由により、困難で消極移住した人、Ⅲ3 前者であったが、再び都市に戻っていった人。Ⅳ 往来民：農山村の大切さに気付き、移住はしないが、志はもっていて、都市から頻繁に通ってくる人。現在も、過去も農山村への出入りはとても流動的であったと考えられる。農山村は完全に閉鎖されていたのではないが、都市に比べて閉鎖性が高い地域社会であったということだ。これら 4 類型の人々の誰が、今後の農山村のレジリエンスに有効に関与するのか。農山村への積極性の強さからして、Ⅰ1、Ⅲ1、Ⅳ の類型の人々であろう。これらの人々が共働して、他の消極的類型の人々をいかに参加へと巻き込んでいくかである。すなわち、半開放系へとムラ社会を今以上に開放的にしていく必要がある。

こうした社会的意味でも、食料安全保障の意味でも、家族小規模自給農耕は重要な意味をもつ。小規模農耕は伝統的な知恵と技能がないと良好な生産をすることができない。農業機械を使用しなくても、農具レベルで、身体的無理をせずに、楽しく、家族のために必要な少量生産をするのである。安全で、美味しい素材を作れるのだ。これで、潜在自給率はかなり高まるはずだ。市民農園は都市緑地公園などとともに社会的共通資本 (コモンズ) として、地域行政府が借り上げるか購入して拡充すべきである。このことに関する小論は別に記した (木俣 2014、2015a、2015b)。

このアンケート調査の対象者は、ほとんどが都会から訪れた環境学習プログラムの参加者であった。田舎の人々が都会の人々に伝統的知恵を伝えると同時に、両者の間での学び合いも必要だ。したがって、田舎の人々、Ⅰ・U・J・O ターンと類型化される都会からの移住者たちの考え方も明らかにせねば、総合的な比較検討ができない。そこで、これら参加者以外の人々についても同じアンケート用紙で、意見を聞きたいが、実際には設問に対応するように書くには戸惑いがあることだろう。面接聴取して、率直な意見を聞くことにしたい。面接者数には限りがあり、集団が小さいので、プログラム参加者との数量的な比較は難しいが、質的な比較は可能である。

表 1.環境学習プログラムに関する5段階評価（記述統計）

	平均値	標準偏差	変動係数	n
B1	4.588	0.6244	13.609	260
B2	4.258	0.7704	18.093	260
B3	4.481	0.7376	16.46	260
B4	4.05	0.8377	20.683	258
B5	4.388	0.8163	18.603	258

表2 アンケート結果のテキスト解析

質問(理由)	カテゴリ(抽出された回数)
B1プログラム評価	できる16、体験11、ある8、思う・プログラム・楽しかった7、子ども6
B2自然・暮らしへの理解	自然18、ある10、ない8、言う・出来る・実感6
B3知恵・技術を学ぶ	思う14、知恵11、ある10、古く8、いう・自然・生活7、まなぶ6
B4暮らしに活かせるか	思う19、活かす9、自然8、自分6
B5農山村への関心	ある10、おもう8、しぜん7、
C1印象に残ったこと	自然14、思う10、茶10、子供9、あるく・中7、食べる・感じる・できる・おいしい6
C2新たな学び・発見	思う17、ある14、ない12、いう9、つくる・なる・くる・自然、食べる・茶・子ども・自分・中6
C3生活を変えるヒント	思う33、自然15、ある11、もっと10、ない9、考える・つくる・自分8、いう・環境6
C4その他	思う16、ありがとう15、ござる11、ある・参加・楽しかった9、参加したい8、自然・キャンプ・ない7、できる・くる・とても・今回・良い6

SPSS Text Analytics for Surveys ver.4.0.1

n=125

調査票のすべてを統合した。

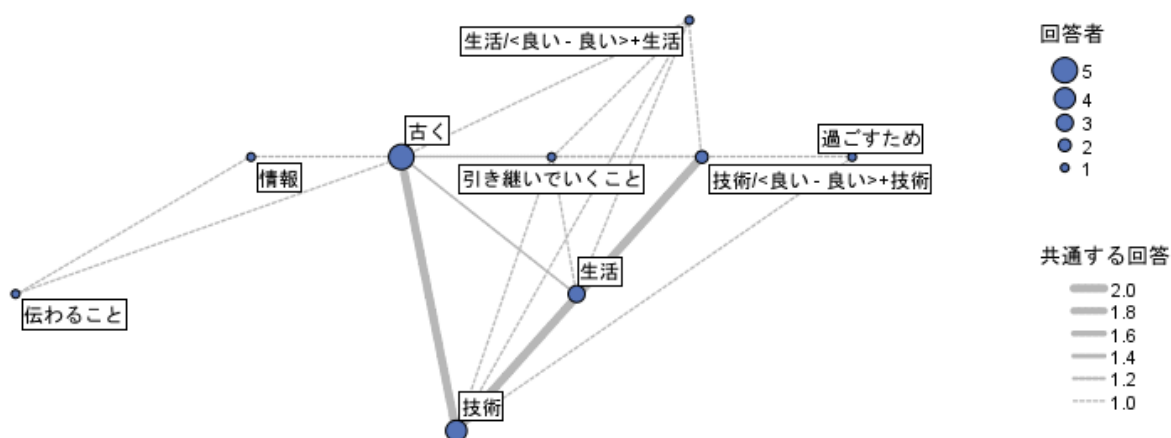


図1 質問 B3「知識・技術を学ぶ」の「知恵」のカテゴリ web

2) 伝統的知識・技能の価値

伝統というものはまるで生き物である。伝統という文化的進化の創造物は、遺伝子に刻まれる生物的進化として伝わるものではない。伝統的知識であれ、伝統的技術であれ、子どもが引き継ぐには、大人をただ真似ればよいのではない。真似をするだけでも容易なことではなく、これらを十分

に習得するには自らその都度時間をかけて、繰り返し再創作しなければならない。ここでいう伝統的知識 Traditional knowledge とは、地域に住む人々の実用的な経験に基づいて蓄積されてきた知識で、地域固有性と状況統合性が高いものである。地域の暮らしに関わる生態、分類、農耕、認知、物質文化、芸術など、とても広い範囲に及んでいる。

伝統的知識は、科学的知識に対置されるものである。意外なことに、むしろ欧米の研究者たちが、慢心した科学万能主義の反省から、自然と共存してきた先住民や小規模農耕民の伝統的知識を評価し、これらから学ぶ必要性を強く主張しているのである。科学的知識と対等に対置して、伝統的知識の新たな解釈および再評価を求めているのである（コットン 1996、ジョンソン 1992）。

民族科学と一般に呼ばれている新たな学問分野である。たとえば、植物学に基礎を置く場合は、植物と人々に関わる全てを研究対象とする民族植物学と呼ぶ。生活道具、食料、医薬品、自然環境保全、生物多様性、遺物、信仰、芸術など、植物に関わるあらゆる事物や事象を研究対象とする。主に、キュー植物園、ユネスコや WWF が中心になって各国の植物園、大学などと共同して、民族植物学の調査研究を進めてきた。

3) 未来のための生業のすすめ

日本の農山村、とりわけ山間地の集落では、過疎高齢化の影響が深刻となり、長年受け継いできた自然と調和した伝統的な暮らしが消滅する寸前に立ち至っている。一方で、何百年、時には千年以上にわたって暮らしを維持してきた集落に蓄積されてきた伝統的知識体系や技能には、現代的な課題となった「持続可能な社会づくり」への示唆が豊かに保全されていることが明らかになってきている。

現在日本の農耕文化の歴史的多層構造

連続的に、混合的な生物文化多様性への蓄積と衰退

複雑 / 単純 The nothing / The convenience

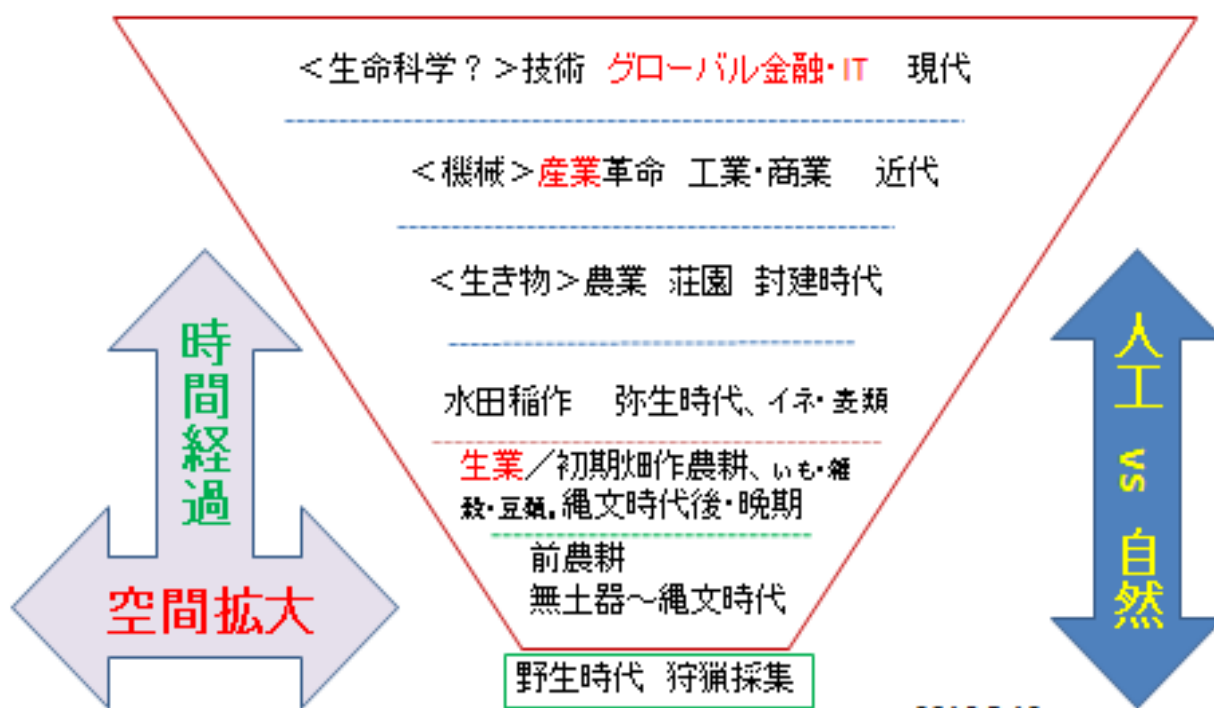


図 1. 農耕文化史のすべての時代を含有する時空間

4) おわりに

参加者の属性によらず、記述統計の結果からは、伝統的知識・技能を体験的に学ぶことの評価は高かった。テキスト分析によっても、実施された環境学習プログラムへの満足度は高いといえる。参加者の主要な関心は自然のなかでの体験である。この体験学習の評価を高めている要素は、人々（山村民、主催者、参加者、交流）、場（自然、農山村）、料理（食材）、および生活文化である。農山村や生活文化に関心を高めるようになるのは、農山村で人々が生の生活経験を話し合うことによってである。これによって人々の生活改善への意欲も高まり、全ての参加者が体験の場を共有したことへの感謝の言葉に繋がっている。

農山村での体験的環境学習プログラムを実施することは準備も大変で、参加者も多くなく、地味な活動ではあるが、確かな効果を着実に上げてはいる。この堅実なモデルを普及して、都市住民がさらに参加するように、各地で類似の活動が広まるよう期待したい。自然災害や社会変動に対する復元力（レジリエンス resilience）は、短期的には伝統的な知識や技能が特に有効であり、このために長期的に見てもこれらを継承保全していくことが社会の安定や家族と地域社会の平安・幸福につながる。このような思考経路を体験的に認識できるような環境学習が望まれ、今後とも研究すべき課題であろう。

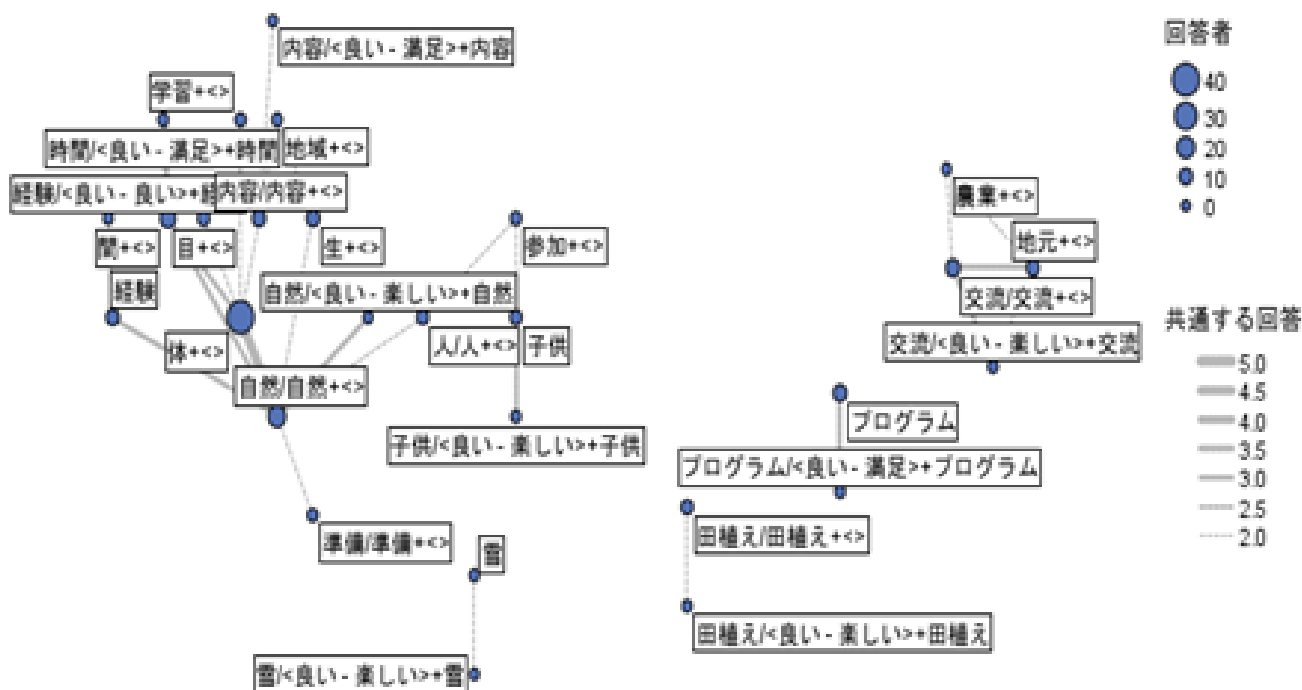


図2a. プログラムの総合評価(Bir1:感性分析、2-5ネットワークレイアウト)

表1. 事例の比較

2015-11-14木塚

	エコミュージウム	最も美しい村	源流の郷	トランジション・タウン
発祥	1971	1982	2005	2005
いつどこで	フランス、ウエツサン島エコミューゼ	フランス	日本、小菅村	イギリス、トットネス
目的・定義	ある一定の地域において、住民の参加によって、その地域で受け継がれてきた環境と生活様式をあらわす自然・文化財産を総体として、 恒久的な方法で、研究・保存・展示・活用する機能を保障する文化機関 である。	田舎の小さなコミュニティ(基礎自治体)の存続と広域連携。特性ある歴史的財産など(社会的共通資本)をもとに観光内容の質を高め、価値づけたプログラムと観光情報を提案する。 協会への加盟は規程の選定基準に即す。	日本の源流域は、国土保全や環境保全の最前線に位置しており、河川の流域だけでなく、我が国にとっても非常に重要な地域。各員一同その責任を自覚し、源流域の環境などを保全に務めている、源流の恵を共有する流域の皆さんと一緒に活動していくことが必要。源流域の重要性を多くの方々に理解していただき、協力が広がるよう「源流白書」を作成し、源流域が存続していけるよう 源流基本法の制定などを提案し、その実現に取り組んでいる。	復元力resilienceを再構築し、CO2排出を減らす活動を創り出しながら、移行モデルをめぐる、自己形成するような共同体を発奮させ、励まし、つなげ、支援し、養成する慈善団体。…市民が自らの想像力を発揮しながら、地域の底力を発揮し、これを高めるための実践的な活動。暮らし方を少し変えるだけで、楽しく豊かに、自由になれる。コミュニティの中で、変化を作り出し、実践、共有する。
活動内容	動産・不動産遺産の目録作成、資料保存・展示、催しの企画、コルクジヨンの充実、 調査研究・普及、報告、など	最も美しい村の呼称とロゴ使用の 審査・管理。観光情報の提供。景観保存、都市計画・政策、文化・自然遺産の保全。	源流域の持つ豊かな自然環境の保全に務めるとともに、源流資源の役割と機能を広く国民に訴え、国民的な理解を広げながら、流域のシンボルとして源流域の安定した生活が持続できるように 全国の源流の郷が心を一つにして「参加・連携、協働の源流の郷づくり運動」を推進すること。	健康的な人間文化を創造する。イベント、会議、研修、出版、などを行う。いろいろな手法で、世界をつなぐ。…エネルギーや食料の自給、心身の健康、環境変化への対応、社会的課題の共有、解決努力。伝統技術の継承、学びの場づくり。
組織基盤	地方自治体、公的機関、合同組合、アソシエーション、財団、市民	州・県、町村の行政	町村の行政	市民、市町村の行政
	国際的に広がる	国際的に広がる	日本国内に限定	国際的に広がる
規模	約90(フランス60、ベルギー3、カナダ1ほか、日本含まず) 1996	フランス157(2014)、日本54(2015)、ほかベルギー24、カナダ36、イタリヤ208(2011)。	22 (2015)	イギリス、アメリカ、オーストラリア、ニュージーランド、イタリヤ、カナダ、フィンランド、ドイツ、デンマーク、ベルギー、オランダ、フランス、スペイン、アイルランド、ラトビア、チリ、ハンガリー、ギリシャ、ソルウェー、南アフリカ、イスラエルなど、公式登録は現在479、うち、日本 3(国内47、2015)
ネットワーク	MINOM 新博物館学のための国際運動 1983	世界で最も美しい村連合会、「日本で最も美しい村」連合(2005)	全国源流の郷協議会、全国源流ネットワーク	トランジション・ネットワーク、トランジション・ジャパン
関連研究組織	日本エコミュージウム研究会 1995			
小菅村での活動	エコミュージウム日本村 2000～		提唱	トランジション小菅 2015～

参考文献: 新井重三、1995、実践エコミュージウム入門、牧野出版。大原一興、1999、エコミュージウムへの旅、鹿島出版会。
R. Hopkins, 2008, The Transition Handbook "From oil dependency to local resilience. トランジション・ハンドブック―地域レジリエンスで脱石油社会へ―、第三書館。
Guide officiel de l'association. 2012. Les plus beaux villages de France. Selection Reader's Digest.

アンケートの内容

実施したプログラムにおいて参加者からアンケートを集めて集計した。

農山村の環境と生活文化から学ぶ都市との交流 評価のためのアンケート

A あなたについて

- 名前（ふりがな）：（ ）
性別：（男性 ・ 女性） 年齢：（ 歳） 職業・学年：（ ）
- 現在のお住まいはどちらですか （都・道・府・県）（市・町・村）
- 住まいの環境は（○で囲んでください）
市街地・都市部 農山村部 その他（具体的に： ）
- 今回を含めてこれまでに農山村でのプログラムに参加したことがありますか？
はじめて 2～3回 4回以上

B 該当する数字に○をつけてください。

- プログラム全体について、総合的にどのように評価しますか。
5 とても良い 4 まあまあ良い 3 普通 2 あまり評価しない 1 評価しない
理由：
- 自然と私たちの暮らしとの関わりについて、理解は深まりましたか。
5 大いに 4 十分 3 どちらとも言えない 2 あまり 1 深まらなかった
理由：
- 古くから受け継がれてきた生活の知恵や技術を学ぶことが大切だと思われましたか。
5 大いに 4 十分 3 どちらとも言えない 2 あまり 1 思わなかった
理由：
- プログラムで得た気づきや知識を、実践につなげたり暮らしに活かせると思いますか。
5 大いに活かせる 4 活かせる 3 どちらとも言えない 2 あまり活かせない 1 活かせない
理由：
- このプログラムを通して、農山村への関心・興味が高まったと思いませんか。
5 大いに 4 十分 3 どちらとも言えない 2 あまり 1 高まらなかった
理由：

C 次の問いに対して、自由にお考えをお書きください。

- 全体を通して印象に残ったことは何ですか。

2. 新たに学んだこと、発見したことはありますか。そのきっかけも教えてください。農山村について、自分について、学び方についてなど、何でも結構です。
3. 今回の体験を通して、環境と調和した公正な社会を作っていくためのヒントはあったでしょうか？また、これから実践してみようと思ったり、生活の中で変えてみたりしようと思ったことはありますか。
4. その他、感想やご意見をお願いします。

雑穀街道の提案

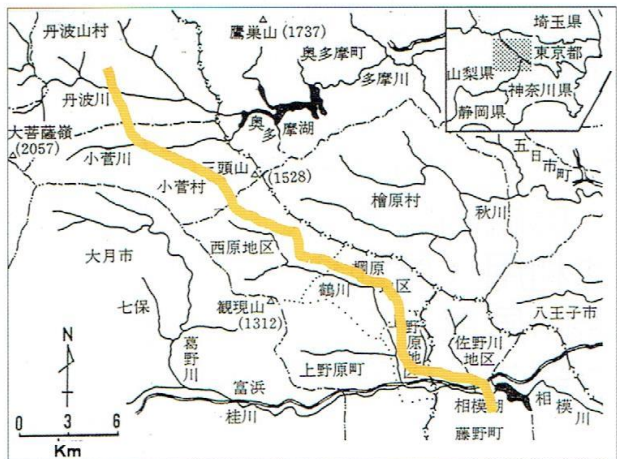
雑穀街道

Hirse Straße



雑穀を栽培する生物文化多様性が豊かな地域、多摩川水系の丹波山村、小菅村から相模川水系の上野原市、相模原市緑区までをつなぐ道を、雑穀街道と呼びます。

栽培植物の在来品種を保存・継承するために種子を共有するつながりを創り、山村の農耕技術や加工・調理技術を継承し、食べ物豊かに、未来に向けて山村社会の復元力を高め、家族とともに幸せに暮らしましょう。



雑穀街道を FAO世界農業遺産に



FAO世界農業遺産とは

伝統的な農業と、農業によって育まれ、維持されてきた、土地利用（農地やため池・水利施設などの灌漑）、技術、文化風習、風景、そしてそれを取り巻く生物多様性の保全を目的に、世界的に重要で、持続可能な農業の実践地域をFAO（国連食糧農業機関）が認定するものです。

雑穀街道に沿って、今も雑穀など在来作物を栽培している山村があります。山女魚養殖を初めて成功させた小菅村橋立、穀菜食による健康長寿で世界に知られた上野原市桐原、トランジション・タウンで知られた相模原市藤野などがあります。世界農業遺産に認定を受けるにふさわしい地域です。

賛同される方は賛同者・団体に加わってください。

連絡先： 特定非営利活動法人 自然文化誌研究会
メール：npo-inch@wine.plala.or.jp 電話：090-3334-5328
詳細：<http://www.milletimplic.net/milletsworld/millstr.html>

「伝統知」の調査研究から、見えてきたことを実践に移す取り組みをスタートさせます。

あしがき

「伝統知」をキーワードに調査研究を継続してきた。前半は伝統知のピックアップと記録、紹介を中心に行い、協力団体であるNPO法人エコプラスが「伝統知の現代的価値を求めて～Traditional Knowledge～中山間地に残る伝統的知識による地域活性化に関する調査研究報告書」にまとめてきた。また特設ウェブサイトに掲載し、誰でも見て活用できるようにしてきた。

後半の3年間は、伝統知の継承と普及をイメージし、実際に記録してきた伝統知からプログラムとして実施できるものを選抜し、事業として実施。同時に参加者からアンケートを取り、分析し、伝統知を未来につなげていく方法を模索してきた。その結果を、シンポジウムという形でまとめたのが、2017年に開催した「伝統知シンポジウム～農山村の環境と生活文化から学ぶ都市との交流」である。

「伝統知」は農山村ではもちろん大切であるし継承されていくべきものだが、狙いはより多くの人口を抱え、伝統知から乖離して生活をせざるを得ない都市住民の方々であった。「伝統知」を感じてもらい、そこから少しでも持ち帰ってもらうことが、伝統知の継承のみならず、自然や知恵を活かし、未曾有の災害があっても生存できるようになったり、これからの子どもを育てていく世代に大切であると考えた。

3年間の取りまとめとして、シンポジウムの開催と報告書の作成を行った。それまでの準備段階で多くの物事を主催者側としても学ぶことができた。プレシンポジウムは、本会の継続している「環境学習セミナー」として実施してきた。

環境学習セミナー①では、末村氏・白井氏・黒川氏・大前氏から、農山村で実際に今行われている活動及び商売の紹介をしていただいた。

環境学習セミナー②では、本会の40年にわたる活動を振り返るとともに、伝統知の根本から見つめ直す作業を行った。

環境学習セミナー③では、持続可能な活動を行う地域、団体からの取り組みを紹介いただいた。

環境学習セミナー④では、農山村の豊かさをテーマに、お話をいただいた。個人的に農山村はエネルギーに囲まれていること。活用しない手は無いということは深く心に刻まれた。

環境学習セミナー⑤では、子どもたち、青少年に教育の中で伝えていく方法をご紹介いただいた。

そして、集大成となる「伝統知シンポジウム」において、「伝統知」の大切さと活かし方を大いに広げることができたと思う。

私個人は、都市住民から本会のメインフィールドである、山梨県小菅村に移住して15年程になる。その中で、職業としてはコーディネーターとして、事業を組み、伝統知を持つ地元住民を講師として引っ張り出し、都市住民に参加体験してもらい持ち帰ってもらうということを続けている。少しでもきっかけになることを期して、地道な活動を継続し、「伝統知」の継承と活用を促していきたいと思う。

同時に、農山村に住む側として伝統知の継承者であるべく、自らの体に刻みこませる機会に幸運にも恵まれている。巻頭に、本会の代表理事がアイヌ文化で記載したように、自分の体で覚えるまで繰り返し行う側にいる訳なので、同時並行で行った結果が、将来継承される「伝統知」の内容になる・・・「生業」がそのまま伝統知になるので、現代のテクノロジーと混ぜ合わせ、「土を触りながらパソコンも触り、学んだことを実生活に活かす」という農山村住民であるというのが・・・未来像として少しずつ明確になりつつある。

NPO 法人自然文化誌研究会
理事・事務局長 黒澤友彦



農山村の環境と生活文化から学ぶ都市との交流に関する調査研究報告書

公益社団法人国土緑化推進機構「緑と水の森林ファンド」中央事業助成
協力 特定非営利活動法人 ECOPLUS

2017年6月30日発行

特定非営利活動法人 自然文化誌研究会 代表理事 中込卓男

〒409-0211 山梨県北都留郡小菅村 3337-2

TEL : 0428-87-0165

<http://www2.plala.or.jp/npo-inch/index.html>